

【優秀賞】

書いては考える、考えては書く

佐々木風美（宮城県 宮城県仙台二華高等学校 2年生）

「結局、何が言いたいわけ。書きたいことが多すぎるのか、僕には伝わらない」。そう言っただけで目の前に広げられた高校一年生の時の読書感想文は、クエスチョンマークや傍線、書き込みで真っ赤だった。

作文はずっと得意だった。それなりに周りからも評価されてきたため、高校生になって初めての作文もさらっと書いて提出していた。だから、担当の先生の言葉に、「えっ」と驚いてしまった。そして次々に指摘される矛盾が悔しかった。戻された作文に向かい、一つ一つ、クエスチョンマークがある文を読み直す。鉛筆を持って指示語をたどると、確かに私の作文はぼんやりとしていてまとまらず、観念的な言葉で多くごまかされている。私の伝えたいことが一つ一つ、同じ重さで並んでいるにすぎない。それが整理されていないので、無理につなげるための指示語が曖昧なのだ。先生の指摘通りだった。

今までの作文も、多少はそうだったはずだ。でも少なくとも、もっと言葉に対して責任を持っていたし、書きたいことが一本に自分の中で出来上がっていた。だから、十回以上も書き直すことも、苦しくはあってもそうせずにはいられない私がいた。

でも、高校生になり、私の中では言わば書くことに対する謙虚さがなくなっていたのだろう。私の流すそのごまかしの表現や書き方では全く通用しない。そもそも、読む人に対して失礼だということも、先生は厳しくもはっきりと私に突きつけたということなのだろう。

すっかり書くことに対しての意欲も、自信もなくしていた。そんな時に手にとったのがこの「井上ひさしの作文教室」だった。これが「文章読本」となっていたら違っていただろう。その時の私の実力は、「作文」という言葉がぴったりだったのだから。

読み進めるうちに、胸の高鳴りを感じた。当たり前にやりすぎてきた表現の間違い、陥りやすい失敗。考えてみると、小学校の時から、書くということをごんごんに丁寧に学んだことなどなかったのだ。そして何よりもこの本は私の苦しさにまっすぐに答ええてくれた。なぜ文章を書くのか、ということだ。

毎年の作文コンクールを初め、自分から進んで作文を書いている。そのために、夏休みは何十枚も原稿用紙に文章を書いてきた。資料としての本も多く読み、新聞を切り抜いて、心ためてきた。その作文が認められることはとても嬉しかった。けれど、今回のように徹底的に批判されても、やはり私は書きたいのだ。その答えはここにあった。

——自分が悩みごとやさまざまなことで追いつめられたとき、言葉がいちばん、役に立つのです。書いては考える、考えては書く。そうして一歩ずつ前へ進みながら、ある決断を自分で下していく——。これが、書くということなのだ。

私は書きながら、悩んでは苦しんで、自分でも気付かなかった思いや考えがペンの先からこぼれ落ちた時の驚きと感動が忘れられなくて、書いてきたのだ。作文が上手になりたいこと、表現し

て誰かに読んでもらいたいと思うことは、単に二次的な喜びでしかなかったのだ。

でも、そこで忘れてはいけないのは、読み手にきちんと伝わって初めて作文は完成するということ。そこまでやれてこそ、作文といえるということなのだ。

私に足りないのは、「誠実さ」でもあるのだろう。井上ひさし氏は、それを「人の言葉ではなくて、自分の言葉で書くということ」と書いている。

私は文章を書く時に、よく人の言葉や文章を引用する。そこから私の考えの裏打ちを取ろうとする。多分、自信がないから人の力を借りようとしているのだろう。私は、誠実に、自分だけにしか書けない思いを言葉にしていかなければならない。そうしない限り、私の文章は借りものでしかないのだ。

そのために必要なこと。それは、長期記憶を海のように深くしていくことだ。人と出会い、話をし、悲しんで、怒って、泣いて全力で心を動かす。知らない土地を旅し、空気を感ずる。一つ一つを心の底にためていく。その意味で、今は生きること全てが書くということそのものなのだ。

そして今年も読書感想文を書く季節になった。書きたいことがたくさんあるのは、まだ準備ができていないということだ。まだもつと考える。そばに置いておく。いらぬものを削ぎ落としていく。書くことは削ぐことでもあるのだ。

たとえ拙くもこちなくともやっと思き上げた作文は、私にしては物足りないものだった。でも、きつとこれが私だ。

「文は人なり」。きつと私はこれからも書き続ける。書くことは、私が生きる、ということ。そのものなのだ。

書名…井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室
著者…井上ひさしほか文学の蔵